Fate/zero
フェイト/ゼロ
10
原作 真じろう 原作 虚淵玄 TYPE-MOON
(ニトロプラス)
Kadokawa Comics A

47 話

Fate/ゼロ
フェイト/ゼロ
漫画 真じろう
原作 虚淵玄 (ニトロプラス) TYPE-MOON

第 47 話
001

第 48 話
035

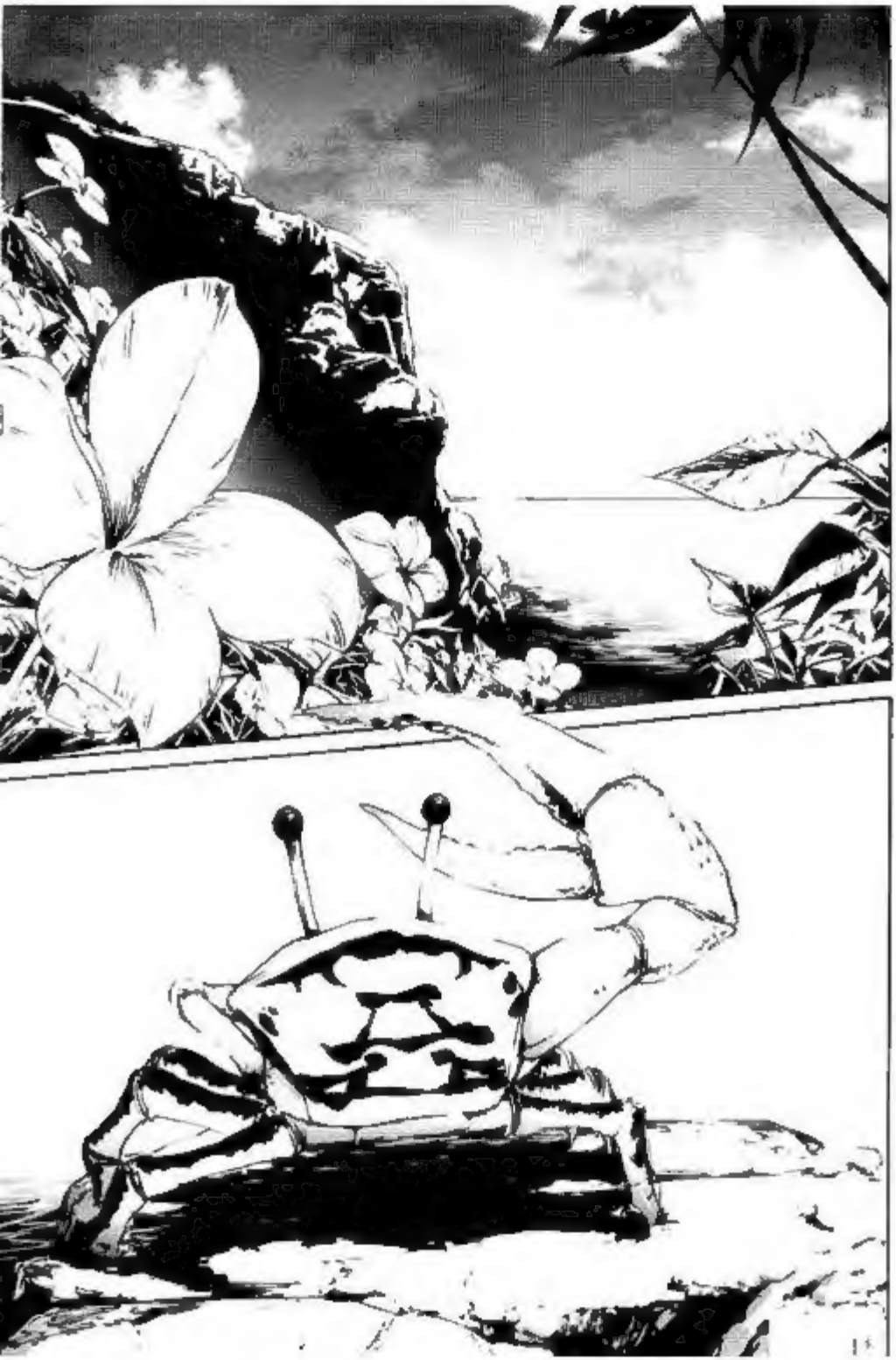
第 49 話
071

第 50 話
099

第 51 話
129

この花
ずっと咲いた
ままだね
時間の流れを
操作してある
花が閉じることも
枯れることもない
問題はこれを
人間にも応用
できるかどうかだ
ここ
これって
シャーレイの？
Shirley
ああ
彼女は
筋が良い
こんなところで
燻ってるのが
惜しいくらいだ

—sometime, somewhere—



しゃ！
ケリイ！
今からお屋敷に行くけど乗ってく？

そういえば
ケリィはさ
この島の名前の
由来って
知ってたっけ？
アリマゴって
「蟹」のこと
でしょ？
ボ
ボ
ボ

そう
大昔この島は
海の神様に
お供え物を
する場所でね
ところがある時
病気の母親に
食べさせる
ものがなくて
困ってた女の子が
つい神様への供物に
手をつけてしまった
それで女の子は
祟りに遭って
沢蟹の姿に変え
られちゃったの
酷い話だなあ

で それ以来
この島で捕れる
蟹を食べると
どんな病気も
たちどころに治る
って話になってね
少女の母親も
それで長患いから
回復したってわけ
そ～
ますます
酷いじゃん
とんでもない
神様だね

その 神様が
祀ってあった社
っていうのは？
もうないわ
本当にあったのか
どうかも解らない
噂だと ちょうど
ケリィのお屋敷の
建ってる辺りが
そうだって

あの幽霊さまざまは
人気取り
ゲルの奥ほど
おいしい供え物を
盗み入った
ヤツのか
近辺で魚でも
捕まえた方が
ふっぽど楽
だろっ
村のみんなが
お屋敷に近付き
たがらないのも
そのせいよ
不吉な場所
なんだって
あんまり
出入りすると
祟られるって
アタシも脅か
されてるのよ
そんな
しゃあ住んでる
僕はどうなのさ
ケリィはもう
余所者っていうより
アタシの弟みたいな
感じだからね
弟か

この島に越してきてもう一年だっけ
もうそんなになるんだねぇ
初めてケリイが来たときは日本人が珍しくって港に村中のみんなが押し寄せたっけ
うん でも自己紹介したら村の人たち僕の名前をちゃんと呼べなかったんだよ
父さんのは呼べたのに
だって日本人の名前って発音が難しいんだもん

シャーレイがケリィなんて呼ぶからみんなが真似しちゃって
シャーレイは僕の本名ちゃんと覚えてる？
エミヤ・ケリトングでしょ？

もういいよ
ケリイで・

とうしたの？
シャーレイ
考え事なんて
珍しいね
ケリィ
ファーザー・
シモンに説教
喰らってき
ファーザーは
あの方のこと
目の敵に
してるからね～
あのお屋敷で
働いてたら
いずれ悪魔に
魅入られるって

そうなんだ
ほら
このナイフ
ジャン!
肌身離さず
持ってろって
ファーザーに
押しつけ
られたのよ
護身あらたかな
お守りなんだって
そうだったの?
むきーん
いつも
果物の皮
剥くのに
使ってるよね
それ
まあ切れ味良くて
使いやすいしね
重宝はして
るんだけど
シャーレイは
怖くないの?
父さんのこと
普通の人しゃないのは
もう解ってるし
村の人たちが
薄気味悪く思うのも
無理ないと思うわ
ああいう研究を
してるなら
都会を離れてこんな
辺鄙な島に隠れ住む
羽目になったのも
仕方ないと思う

でもね 本当は
凄い人なんだよ
キミのお父さんは
彼の知識や発見は
どれも世の中を
ひっくり返すほど
大変なものばっかりよ
そりゃ
怖がられて
当然だし
だから秘密に
してるのも
仕方ないけど
でもアタシ
本当はね
あの力をちゃんと
世の中のために
役立てて使って
くれたらとんなに
良いかって いつも
思ってるんだ
そんなこと
出来るのかな
リリリ
あの方は諦め
ちゃってるね

でもケリィ
キミになら
きっと
出来ると思う
何だよ
父さんの一番弟子は
シャーレイじゃないか
父さんだって
褒めてたし
やるとしたら
シャーレイだろ
ハハ ホント
だとしたら
嬉しいなあ
でもアタシは
弟子なんか
じゃないよ
せいぜい
助手が
いいところ
雑用係
お手伝い
だから
肝心なところは
何も教えて
もらえないしね

でもね ケリィは
間違いなく
お父さんの
跡継ぎなんだよ
お父さんが続けてる
研究は何もかもいつか
ケリィに引き継がせる
ために準備してるもの
ばっかりだから
たぶ 今は
まだ早すぎる
ってだけ

しゃあさ
僕が父さんの研究を
引き継いだら
シャーレイは一緒に
手伝ってくれる？
ケリィと？
どうしよう
かなぁ
父さんは良くて
僕はダメなの？

フフフ
ウソだってば
でもあの方の研究を引き継ぐのはもっとケリィが大人になってからだと思うよ
それってケリィが大人になるまで一緒にいて良いってこと？
へ
あ
まぁ
そうなるかな
そう
わかった
なら——

良いよ
ケリィの傍にいてあげる

アタシの人生をケリィに預けるよ

どうしたの？
アタシの顔に
何かついてる？
いいや
何でも
ないよ！
ケリィはさ
どんな大人に
なりたいの？
お父さんの仕事を
引き継いだら
とんな風にそれを
使ってみたい？

えっ
世界を
変える力
だよ
いつかキミが
手に入れるのは
ポチャ
そんなの
内緒だよ
ふうん

じゃあ
大人になった
ケリィが
何をするのか
アタシにこの目で
見届けさせてよ
勝手にしろよ

切嗣
昨日 私の工房に
入ったりしたかっ
入って
ないよ

そうか
切嗣
今日は村に
行くな

えっ
とにかく
家から出るな

とうしたんだろ
シャーレイ
いつもなら
もう来てる
時間なのに
ここ
Shirley

シャーレイ
鍵が開いてる
ガチャ
ねぇ
シャーレイ
いないの。
この筆跡
父さんの

シャーレイ!?
どこだよー
ガン

ガチャ
ガチャ

第47話／END

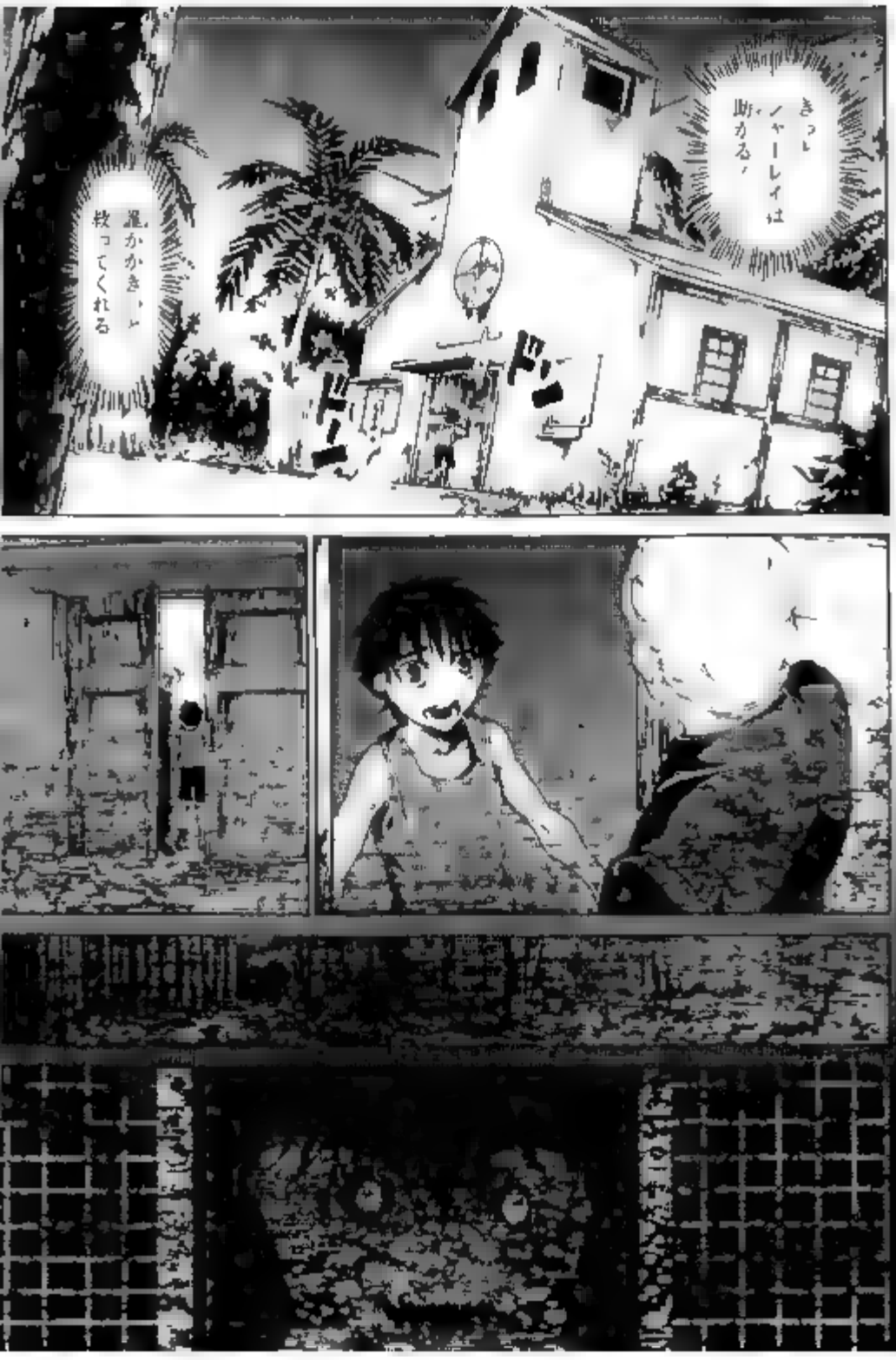
第48話
痛いっ
痛いっ
どうしようもない
こんな程度の血しゃ止まらない
このままじゃアタシー

だからお願い
嫌いの
自分しか
できない
ケリィがアタシを
殺して

そんな
出来るわけが
ない
ずっと
一緒にいると
約束してくれた
人のな
もう
駄目
だなら
なにもかもなくなる前に
今なら
また
きっと
君に会う
早く!

ドレ
ドレ
オネガイ……

助けて
誰か助けて
ノーレイを助けて
きっとこの悪夢のような状況を何とかしてくれる大人がいるはず
そうだノモン神父だ
神父ならノーレイを


きっとノヤーレイは助かる
誰かがきっと救ってくれる
ドーン
ドーン

私の名前は
ナタリア・
カミンスキー
さて坊や
私も名乗ったところで
そろそろ質問に答えて
欲しいんだけど

何が
どうなってる？
先に質問したのはこっちだよ
いい加減 正気に戻ってくれないかい？
今 あの村で暴れてる連中は一グループあってね
片方は「聖堂教会」の代行者
君が知ってるような優しい神父様とは訳が違う

神に背いた割当たりは
皆殺しにしていい
と悟じて疑わない連中さ
血を吸われた
奴らも残さず
殺すし
見分ける余裕が
なくなれば
血を吸われてる
かもしれない
奴であろうとも
殺し尽くす
もちろん
吸血鬼なんて
見つけたら
容赦しない
つまり今の連中
まったく余裕が
ないってこと

でもう　方の
「協会」は
ちょいと説明が
難しいんだが――
そもそも
吸血鬼なんていう
奇天烈なモンを生み
出したのが誰なのか
その秘密を独り占め
したいって連中だ
当然、独り占めが
モットーなわけだから
他に事情を知って
そうな奴は残さず殺す
口封じ
証拠隠滅
徹底的に
やらなきゃ
意味がない

まぁそんな
駅で少年
君はとっても
運かいい
今この島で
あいつらの大掃除から
逃げ延びて生きてる
住人はたぶん君ぐらい
なもんだろう
心配する
ことはない
私の力では
どうにもできないが
対処できる人間を
選んでくれるよう
連絡を付けた
そろそろ到着
するはずだ
ああ
話をすれば
ガチャ

いつから誰だお前は
あああ
ああ

ああ――そうか
夢か…あれをはじめの
あの時…
悪いとおもいながらも
こんなことに
なってしまった
それ以上
誰も死ぬことはなかった

あんたは
どっちの味方
なんだい
私は"協会"相手の
セールスマンさ
ヤツらが欲し
がってる"秘密"を
こっそりと確保し
売り渡すのか仕事だ
勿論こうして
大事になるより
前でなけりゃ
商売にならない
今回はちと
出遅れ
ちまったね
さあ
それじゃあ
坊や
そろそろ私の
質問にも答えて
もらおうか
封印指定
——といっても
君には何のこと
やら解らんか
まあともかく
今回の吸血鬼騒ぎの
元凶になった
悪い魔術師が
この島のどこかに
隠れてるはずなんだ
君何か
心当たりは
ないかい？

ただいま
父さん
――切嗣…

ああ
無事だったか
本当に
良かった
今日は絶対に
森の結界から出るなと
さんざん言い含めて
おいた筈だぞ
なぜ私の
言いつけを破った
シャーレイが
心配だった

やっぱり
父さんはシャーレイの身体に何が起こったか知ってたんだね？
だから僕に外出するなって命令したんだね？
あの子については本当に残念だ
試薬は危険だから決して触るなと言っておいたんだが
とうやら好奇心に勝てなかったらしいな

ねえ
父さんはなぜ
死徒の研究を？
もちろん
私とて本意
ではないさ
だが我ら
衛宮の探究には
どうあっても
久遠の時が要る
私かさもなければ
せめてお前の代までには
寿命についての対策を
講じておく必要があった
死せる運命に
縛られた肉体
では「根源」は
遠すぎる
父さんは
いずれ僕のことも
あんな姿に？
馬鹿を言え
吸血衝動を
抑えきれない
死徒化など失敗だ

その点 図らずも
シャーレイは早々に
答えを出してくれたな
手間取かかった
試薬だったが
どうやら結果は
芳しくない
また根幹から理論を
見直さなければ
ガリ
そうなんだ
父さんはまだ
この研究を続ける
つもりなんだ
切嗣
この話の続きは
また今度にしよう
今は逃げる
のか先決だ
悪いがお前に
荷造りさせている
余裕はない
そろそろ
協会の連中が
この森の結界を
見破る頃合いだ
すぐにも出るぞ
逃げ
られるの？
今から
こんなことも
あろうかと以前から
南側の海岸に
モーターボートを
隠しておいた
備えあれば
憂いなしだ

使いな
十一口径
至近距離から
落ち着いて狙えば
子供でもきちんと
当てられる

ビクッ
ハア

どうして父さんを
殺したのに
僕はこんなに
冷静なんだろう

すごい人なんだよ
僕のお父さんは
僕のお父さんは
魔術師の
研究者だった
それが
この人が
凡庸な
殺された
シャーレイも僕も
魔導が幸せを
もたらすと信じていた
あの力を
世のために
どんな
使われたら
いいかって
その行いが世界を
正しく変えるもの
だと信じていた
それなのに

離れろ
離れろよぉ
どうして
どうして
離れないんだ！

坊やに警告されたほど
ここの結界は手強い
モンじゃなかったよ
わりと簡単に
突破できた

そうと解ってりゃ
こんなもの
坊やに渡すまでも
なかったからね

怒ってるのか？
あんた

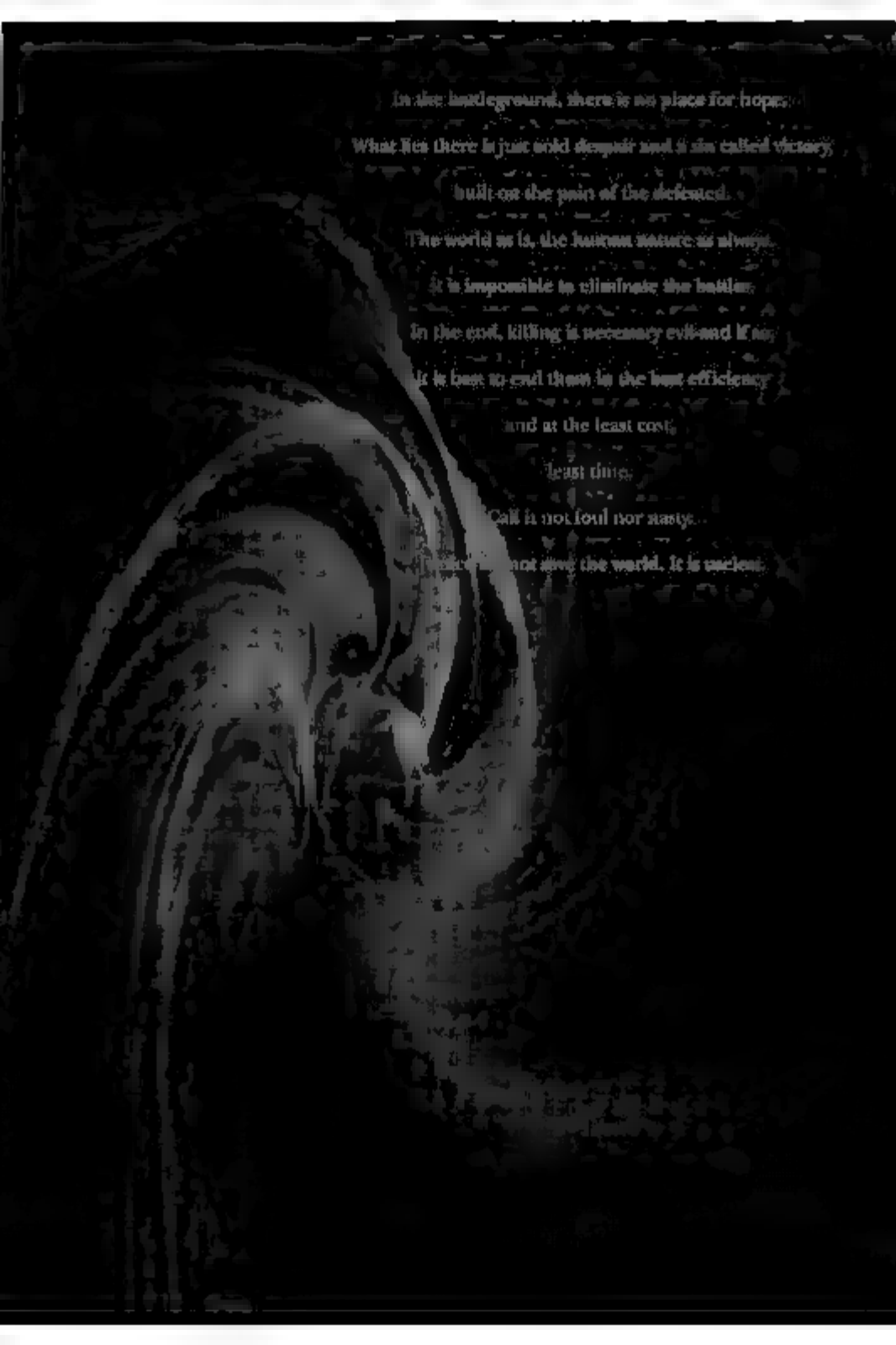
でも結局あんたが
間に合うか
どうかは運任せ
だったわけだろ？
この人を
確実に殺そうと
思ったら——
僕がやるしか
なかった

そいつは子供が
親を殺す理由としちゃ
下の下だよ

……あんた
いい人なんだな
島の外までは
連れ出してやる
後のことは
自分で考えな
何か持って
いくものは

第 48 話　END

Fate


In the battleground, there is no place for hope.
What lies there is just total despair and a so called victory,
built on the pain of the defeated.
The world as is, the human nature as always.
It is impossible to eliminate the battles.
In the end, killing is necessary evil and if so,
it is best to end them in the best efficiency
and at the least cost,
least time.
Call it not foul nor nasty.
not save the world. It is ancient.

第 49 話

あの島で
起きたことは
何も珍しいことは
しゃないんだよ
ああいう
クソッタレな災禍は
表沙汰にされないだけで
世界中で日常茶飯事の
ように繰り返されてる
魔術師の生きる
世界ってのは
そういうもんなのさ
私の仕事は
結果だけを見れば
そういう問題を
起こしそうな輩の掃除
——とも言えるかね

なあ
アンタの仕事
僕にも
手伝わせてよ
本気で
言ってんのかい？
もちろん

結局のところ
続く五年の歳月を切嗣は
ナタリア・カミンスキーの
許で過ごすこととなる

魔術刻印か
痒くかいて
まあ
耐えるしか
ないね
坊やの父親の死体から
移植したものとは言え
元は他人の一部だ
そう簡単には
馴染まないよ
交渉はしたが
移せた魔術刻印は
ほんの二割ほどだ
後は協会に持って
かれちまったが
それでも取れた方さ
とはいえ
魔術師として
将来独り立ちするには充分だろう
私が腹括ったからには
坊やにいつまでも
タダ飯食わせる
つもりはないからね
さっさと使い物に
なってもらうよ

あの日 その手で
父を殺したことに
本当の意味で価値を
見出そうと思うなら
それは父と同じ
魔術協会の
管理を離れた
異端の魔術師たち
即ち――
「封印指定」を残らず
狩り殺した果てに
ようやく見出せる
救済でしかなかった
「封印指定執行者」

条理の外の
魔を狩る狼犬
そんな人ならざる
修羅の生き様を
少年は何の躊躇も
なく決意した
切嗣は父のように
魔術を生涯の目的と
するのではなく
手段の一環とする
形でナターリアから
教えを受けた
さらには退路術
暗殺術
多種多様な兵器の
取扱いに至るまで

いいかい
何があろうと
手段を選ばず
生き残るんだよ
同時に切嗣は
人間がどれだけの
歴史と知性を費やして
〈殺人〉のテクノロジーを
磨き上げてきたのか
身をもって学び取った

血と硝煙にまみれた歳月は
飛ぶように過ぎた

オッド・ボルザーク？
「魔蜂使い」の異名を持つ魔術師さ
奴は限定的だが死徒化にも成功していて
使い魔である蜂には刺した相手を屍食鬼化させる毒があるってんだから厄介な相手さ
こいつが今回の標的かい？
そうだ

奴は顔を変え名前を変え
一般人に紛れて長らく
消息不明だったんだが
取引のためにパリから
ニューヨークへ向かう
という情報を得た
四日後の
ニューヨーク行きの
旅客機に搭乗する
ってまではわかってる
私が奴と
同じ便に搭乗して
機内で狩りを仕掛ける
しゃあ僕は
ニューヨークに先行して
取引相手を洗い出せば
良いんだね
わかってる
じゃないか

坊やはそこから
ボルザークを
特定するための
情報を手に
入れるんだ
使用されている偽名
特徴 何でもいい

そろそろ
行掛ける頃合か

コキ
コキ

TOILET
状況は？
狩りは案外あっさり済んだよ
そっか良かった
あっけないもんだ

残るはそっちに到着後
騒ぎになる前に
貨物の中から奴の
荷物を速やかに
回収するだけだが
大丈夫
手管は整ってるよ
ならいい
キャアア
!!
ナタリア
今のは？
客室の様子か
おかしい
おいおい
嘘だろ……

なんてこった!!

リア
ナタリア！
いったい
何があった!?
ボルザークの野郎
どうやら
蜂を腹の中で
飼ってたらし
それも一匹や
一匹じゃない
奴を殺したことで
蜂どもが溢れ
出やがった……
クソッ!!

客室の方が騒がしいな
ちょっと様子を見てきてくれないか
わかりました機長
うんっ
ドキ

馬鹿！
開けるんじゃないよ!!
誰かにドアを閉められました
CAからの連絡もありませんしかなり混乱しているようです
緊急事態を宣言すべきかなんとか状況を把握せねば

ナタリア
お願いだ
反省してくれ
ナタリア
……
……
……

僕だ
いつも世話になってるな
また用意してもらいたいモノがある
急ぎなんだが頼めるか？

第 50 話

聞こえてるかい？ 坊や
寝ちまっちゃいないだろうね？
感度良好だよ ナタリア
お互い徹夜明けの辛い朝だね
昨夜の君がベッドで安眠してたんだとしたら後で絞め殺してやりたいよ

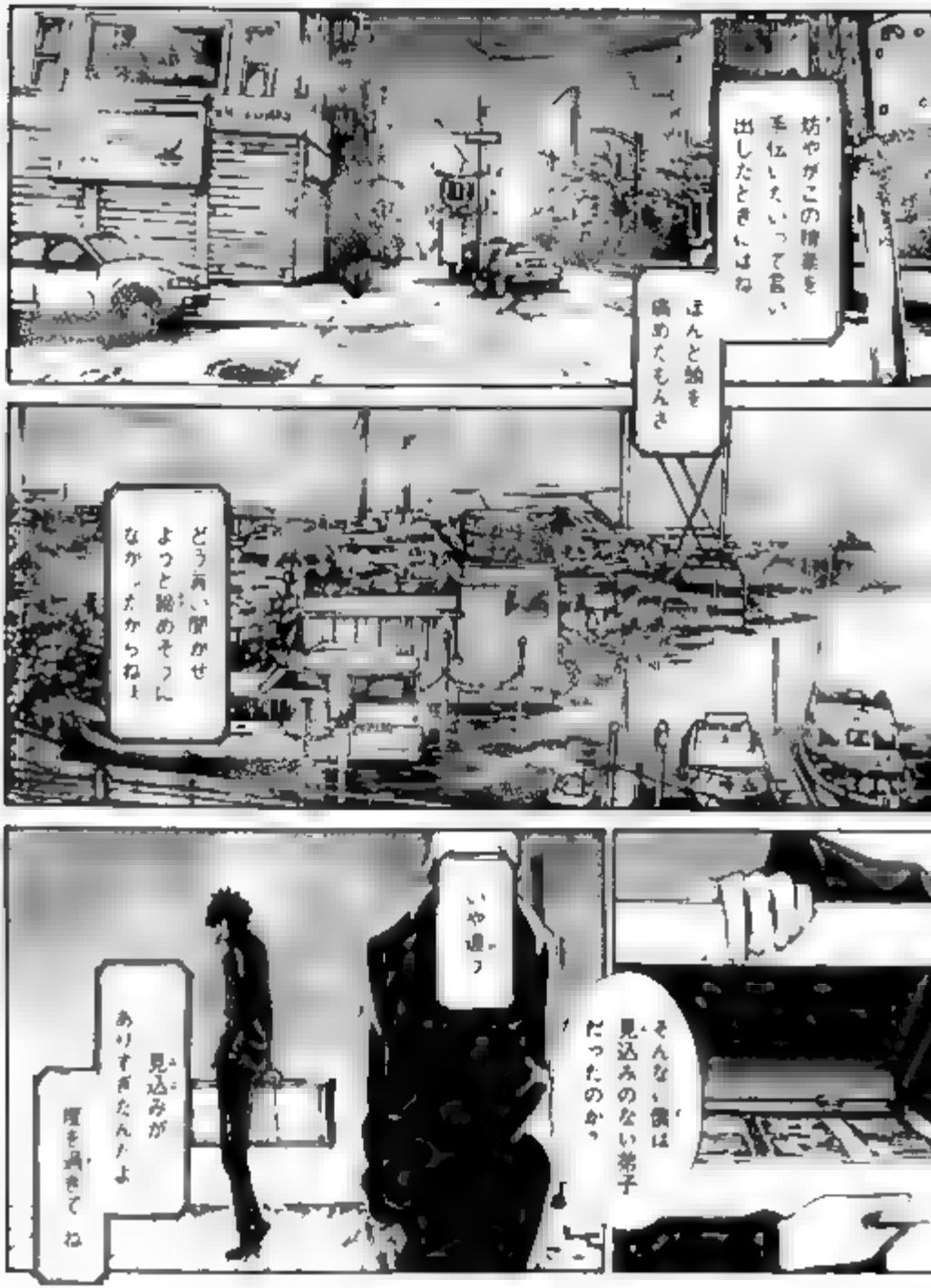
さて
良いニュースと悪いニュースとっちから聞きたい？
良い報せから話すのがお約束だろう？
オーケイ
まず喜ばしい話としちゃあとりあえずまあまだ生きてる
飛行機の方も無事だ
ついさっきコックピットを確保したばかりでね
機長も副操縦士も"臨終"ってのが近けるところだが操縦だけなら私でもできる
セスナと同じ要領で何とかなるなら の話だけとさ

管制塔と連絡は？
つけたよ
初めは悪ふざけかと疑われたけどね
優しくエスコートしてくれるとさ
で悪い方は？
ん
結局噛まれずに済んだのは私だけだ
乗員乗客三〇人残らず屍食鬼になっちまった

コックピットから
扉一枚隔てた
向こう側は既に
空飛ぶ死都ってわけ
ぞっとしないねぇ

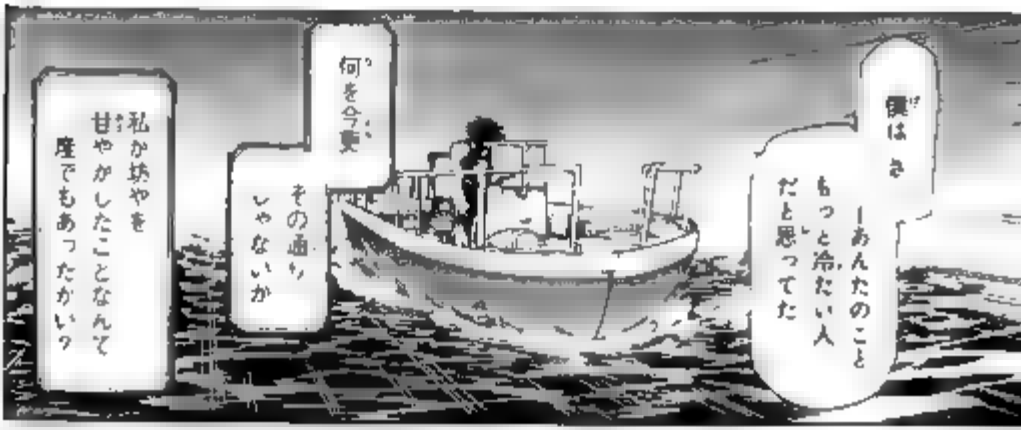
ギリ…
その
有様であんた
生きて凌って
こられるのか？
まぁ腹は充分に
頑丈だしね
今もガリガリ
引っかかれてるけど
プチ破られる
心配はないさ
こんなデカブツ
本当にあしらい
きれるもんなんだか
むしろ
着陸の方が
不安でねぇ

あんたなら
やってのけるさ
きっと
クシャ
励ましてる
つもりかい？
嬉しいこったね
空港まであと
五〇分ちょっと
祈って過ごすには
長すぎるねぇ
坊や
しばらく
話し相手に
なっておくれ
…構わないよ


坊やがこの時季を
手伝いたいって言い
出したときにはね
ほんと嬉を
抱めたもんさ
どう言い聞かせ
ようと説めそうに
なかったからねぇ
いや違う
そんな、僕は
見込みのない弟子
だったのか？
見込みが
ありすぎたんだよ
腰を据えてね

大概の殺し屋が
数年がかりで身に
つける覚悟なんた
指先を心と
切り離したまま
動かすって
いうのよね
とういう
意味だい
坊やはソレを
最初から
持ち合わせた
とんでもない
資質たよ
でもね 素質に合った
生業を選ぶってのが
必ずしも幸せなこと
だとは限らない
才能って
やつはね
ある 線を越えると
そいつの意思や感情
なんぞお構いなしに
人生の道筋を
決めちまう
人間そうなったら
オシマイなんだよ

"何をしたいか"を考えずに"何をすべきか"だけで動くようになったらね
そんなのはただの機械
ただの現象だ
ヒトの生き様とは程遠い


僕はさ
―あんたのこともっと冷たい人だと思ってた
何を今更
その通りじゃないか
私が坊やを甘やかしたことなんて産でもあったかい？

そうだな
いつだって厳しくて手加減抜きだった
あんた"手抜き"せずに本気で僕のこと仕込んでくれたよな

男の子を鍛えるのはふつう父親の役目だからね

坊やの場合
そのチャンスを
棄っちまったのは
この私が原因
みたいなものだ
まぁ何て
いうか
引け目を
感じないでも
なかったん
だろうさ
まぁなんにせよ
私に教えられる
生き方なんて他には
なかったからねぇ
あんたは
僕の父親の
つもりで？
男女を
間違えるなよ
失礼なヤツめ
せめて母親と
言い直せ
そうだね
ごめん

長い間
ずっと一人で
血腥い毎日を
過ごしてた
自分が独りぼっち
だってことさえ
忘れちまう程にね
ドから
まあ
フン
それなりに
面白可笑しい
モンだったよ
家族
みたいなのと
一緒ってのは

僕も――
僕も あんたのこと
まるで母親みたい
だって思ってた
一人じゃないのが
嬉しかった
あのな
次に会うときに
気恥ずかしくなる
ようなことを
そう続けざまに
言うのはやめろ
ああもう
胴子が狂うねぇ
あと 一〇分か
そこらで着陸
たってのに
土壇場で思い出し笑い
なんぞ してミスったら
死ぬんだぞ 私は
ごめんよ
悪かった

万が一にもナタリアが機の術陣を成功させてしまったら
一つ体に及ぶ死食鬼たちを市街に解き放つことになる
あの旅客機は決して着陸させてはならない
万が一？
：
ナタリアの死を諦観するだけなら まだわかる
もしも子供か捨駒の一人でも繋がるものを生かそうとするなら
だが僕は万に一つの奇跡に賭えて彼女を確実に殺す算段をこうして淡々と進めている
僕は本当に人間なのか……？

何だって？
いや
何でも
ないよ
ひょっとすると
私ももうヤキが
回ったのかも
知れないね
こんなトシを踏む
羽目になったのも
いつの間にやら
家族ヅコで
気が緩んでたせい
かもな
たとすれば
もう潮時だ
ら退するべき
かねえ
仕事をやめたら
あんた その後は
どうするつもりだ？
失業したら
——ハハ
そうさねえ
今度こそ本当に
母親ゴッコぐらい
しかやることが
なくなるなあ

あんたは——
あんたは僕の本当の家族だ

ま
ん
た
ね

見ていてくれたかい？
シャーレイ……
今度もちゃんと殺したよ
父さんと同じように殺したよ
キミのときみたいなヘマはしなかった

僕は大勢の人を
救ったよ……

ふざけるなッ！
馬鹿野郎ッ!!
ふざけるな

ただもう二度
ナターリアの敵が
見たかった
つか旭と向かって
「おとうさん」と呼べる
日を待っていた
こんな結末を
願ったわけじゃない
それでもこれで
正しいんだ!!
死ぬしか他にない
者が殺されて
死ぬ理由のない
人たちが救われた
これが
「正義」でなくて
何なんだ!

もしも世界を変えられるなら
奇跡がこの手に宿るなら――

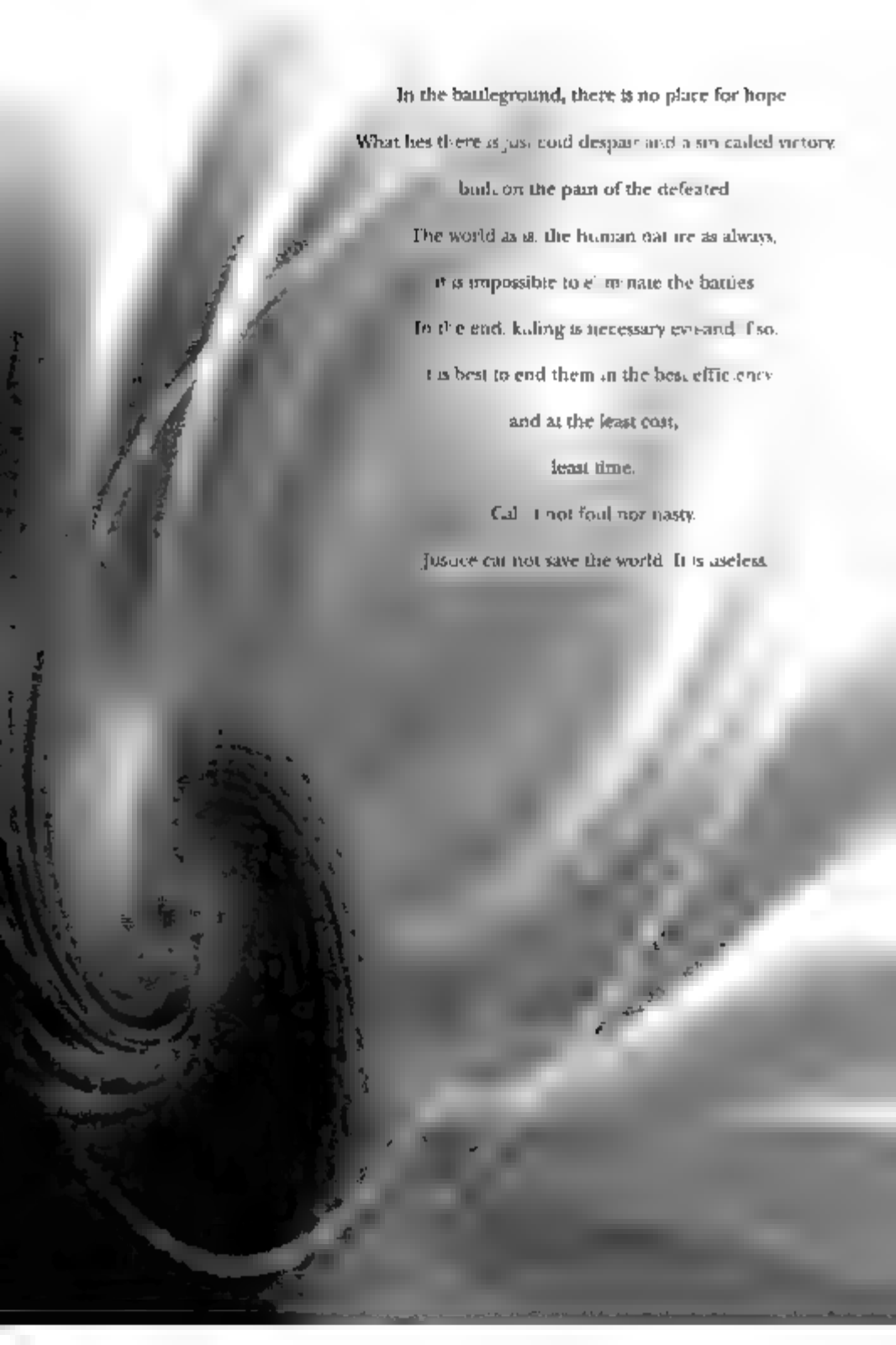
僕は〝正義の味方〟になりたい

"正義"という名の
大枠は男から父を奪った
母も同然だった
人を奪った
それが憧れ求めた
理想の代価だった
彼らを懐かしみ
偲ぶ権利さえ
奪っていった
男は理解する
いまさら止められる
はずがない
立ち止まった
その瞬間から
追い求めたものは
無になる
支払った代価も
積み上げた犠牲も
すべて無価値に
崩れ去る

男はすべてが
報われる日を祈り
胸に宿る理想を
遂たず成し遂げていく
それを憎みながら
呪いながら……

この子に担う残酷が
ヒトの極みにあるならば――
この世全ての涙をかき集め
拭い取ることも叶うはず

Fate



In the battleground, there is no place for hope

What lies there is just cold despair and a so called victory

built on the pain of the defeated

The world as is, the human nature as always,

it is impossible to eliminate the battles

In the end, killing is necessary evil and if so,

it is best to end them in the best efficiency

and at the least cost,

least time.

Call it not foul nor nasty.

Justice can not save the world. It is useless.

第51話

これが大聖杯の器…
ただの容器なら
それ相応の形が
あろうものだが
まったく
やり辛い
オイ 僕の言葉は
理解できるか

貴方はアインツベルンのホムンクルスについて随分過小評価をなさっているようですね
私は人体として備わっているべき全ての機能
常人をはるかに凌駕する魔術回路
初期世代として規格化された略式魔術刻印が埋め込まれています

はい
衛宮切嗣
驚いた声も出ぜるのか

魔術師の素体としては貴方を上回る性能を備えているはずです
ああ
大変に結構
だがそんな御大層な機能は僕にとってありがたくもなんともない

君は自分が一体どういう目的で錬成されたのかちゃんと理解しているのか？
はい
私は聖杯の器
来たるべき第四次聖杯戦争において大聖杯を起動させる鍵として機能する存在です

そうだ
ただの話だ
何でそいつか
手足を生やし
いっぱしの口を
きいてる？
意味が分からない
では意味を
ご説明
します
聖杯の器を保護する上で
最も効率的な手段として
自立行動と状況判断の
機能を果たすべく
付加された肉体
それが私
という存在です
では聞く
君は本当に戦場で自衛
できるだけの能力を
備えているのか？
そのように設計
されています
良いだろう
では実際に
試してみる
までのことだ

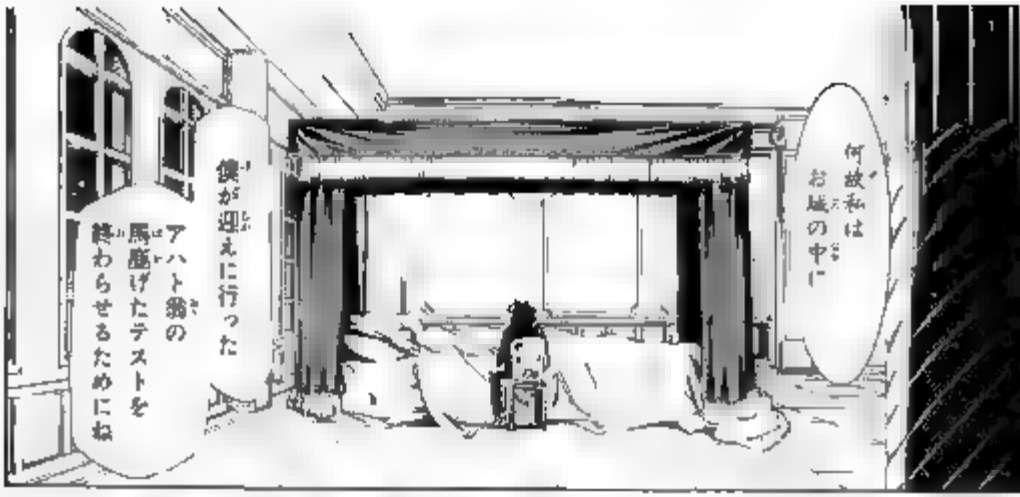
ぐっ
おい ふざけて いるのか
この程度の 攻撃にも 対処できないで どうする
対処の必要が ありません
貴方は衛宮切嗣であり 聖杯の器を破壊する 意図などあるはずがない

攻撃に対する反撃の殺傷力の釣り合いが貴方が定義するところの自衛なのですか？
そうだ 何か文句でも？
それは生存を確保する上で最悪の選択です
最も優先されるべきは危機的状況を我が身から遠ざけること
それが不可避な状況では逃亡 降伏 非戦的交渉などの次善の策となるはずです
はっきり言っておく
僕が必要としているのは屁理屈ではなく戦闘の能力だ
殺されるより先に殺す素早さと正確さと破壊力だ
それは生存の戦略ではない
こと自衛という観点において比較するならば貴方は私より脆弱です
こいつ

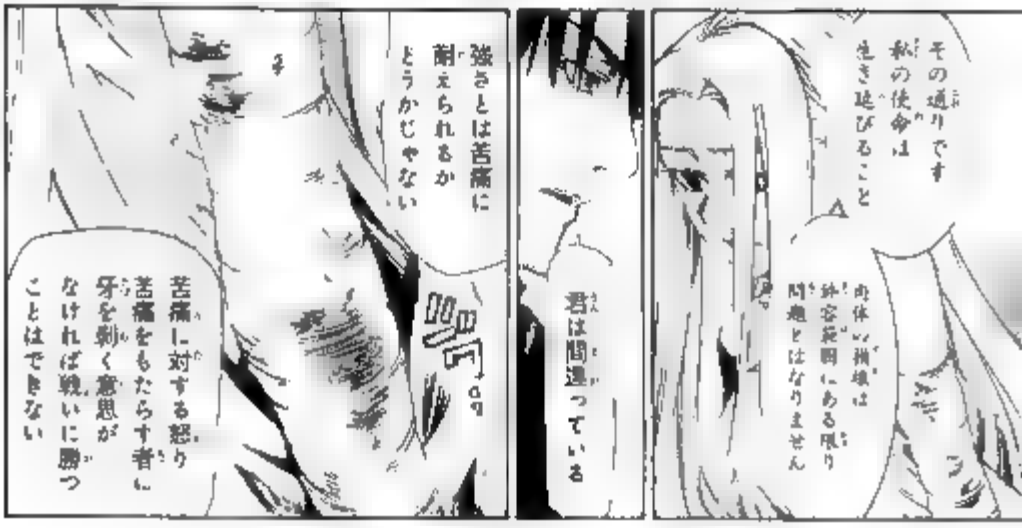
不服かね？
あれは近年の鍛造の中で屈指の仕上がりの個体なのだが
だから僕をここに呼び寄せたんでしょう？
フン さすがは魔術師殺しの衛宮切嗣だな
発想の野蛮さにおいては私たちの理解を超えて余りあるな
せめて扇かトーベルマンの身体でも与えておけばまだしも使い道があったでしょうに
あれでは街角の酔っ払いに絡まれただけでも怪我しかねない

アレについては
その頑強さについて
証明すればまずは
十分であろう
アレは自らが
壊れることを
忌避するよう
設計してある
その無能性を
お前に直に
見せてやろう
そうさな
後二三日もすれば
結果は出るだろう
どういう
ことです？
ちょっとした
実験――
耐久試験とでも
言っておこうか
夕べの内に
森のはずれにある
失敗作の廃棄場に
アレを放置した
なっ
この極寒の吹雪の中
丸裸にされ飢えた狼や
怨霊どもに囲まれれば
屈強な戦士も一夜の内に
喰い殺されるか凍え死ぬ
であろうが――
アレが独力で
この城に生還
したならお前とて
文句はあるまい
正気の沙汰
じゃない！
いくら
ホムンクルス
とはいえアンタが
手ずから作った
娘だろうが！

壊れないこと
大聖杯の儀式に
至るまで自らを
保存しうること
私がアレに
託したものは
それだけか


何故私は
お城の中に
僕が迎えに行った
アハト翁の
馬鹿げたテストを
終わらせるためにね

いけません
私はまだ試練を
達成していない
私の耐久性を
貴方に証明
していない
ふざけるな
こんなボロボロに
されてまだ虚勢を
張るのか
それが君の言う
強靭さなのか?


その通りです
私の使命は
生き延びること
肉体の損壊は
許容範囲にある限り
問題とはなりません
君は間違っている
強さとは苦痛に
耐えられるか
どうかじゃない
苦痛に対する怒り
苦痛をもたらす者に
牙を剥く意思が
なければ戦いに勝つ
ことはできない

君はあの当主に怒りを感じないのか？
何故ですっ 大お爺様には何の落ち度もありません
アイツは僕から受けた屈辱をすすぐためだけに君をこんなに傷つけた
君の苦痛よりも君の設計者としてのプライドを重く見た
あぁ そもそも君のことを傷った僕にも責任がある
だから君は僕とアハトに対して怒りを抱くべきなんだ
どちらも君を傷つけることになった元凶なんだから
現状の破損状況、おいて私の肉体は聖杯の器として機能を十全に果たせません
よって私の苦痛より大お爺様の名誉と貴方の損傷を解消することの方が優先事項です
違う……違うんだ！
君は強くなるために闘争という行いの機構にある「怒り」という感情を身に付けなくてはならない
君はどんな形であれ君自身が損なわれることについて抵抗しなくてはならない
何る意味を理解しかねます

君は自分の価値
存在意義について
あくまで理屈の上では
理解しているようだが
この世に生まれ
落ちたこと
自分に課された
使命について
「喜び」「誇り」
を感じるか？
今回薦ろに
されたのは
君のそういう
部分について
なんだよ
君が君自身を保護
することを使命だと
思っているのなら
もっと強くなりたい
だろう？
戦いに勝つための
戦略を広く
用意しておきたいと
思うだろう？
はい
も　可能で
あるならば
それはとても
有益な学習です
それならばまず
君は君自身について
関心を持て
君の人生と
その舞台となる
世界に喜びを探せ
そしてそれを
損なう出来事を
決して許してはならない
そうすれば君は
怒りという感情を
手に入れられるはずだ

喜び
関心
根拠のない
感情を抱く
ことは困難です
まったく
こんなところから
面倒見なきゃ
ならないなんて
わかった
僕が教えてやる
まずは君の――
君には名前は
ないのか
器とかじゃなく
君固有の呼び名は
私はアイリスフィール
フォン アインツベルン
と申します
その後例の
ホムンクルスは
どうですか

日に日に
見違えるほど
変わっていく
もともと学習意欲が
旺盛な性格付けが
なされていたんだろうな
与えた事柄は
どんなものでも
貪欲に吸収し
その分
情緒についても
豊かになっていく
だが
こんな教育が
果たして意味を
持つのか
真弥 お前は以前
自分のことを
標識として
自覚していると
そう言ったな？
はい
それが何か？

そういう心づもりで
何故 戦場で自分を
強く保てるのか
不思議に
思えてきたんだ
貴方らしくない
疑問ですね
戦場でヒトのように
心を支えるか——
貴方にとっては
自明すぎる理だと
思っていましたが
彼女を訓練している
内に僕もいろいろと
混乱してきたようだ
自我を壊えることで
闘争本能を植え付ける
ことができたら
戦闘にも適応できる
かと思いはしたが
そもそも僕は
前提からして
間違っていたん
しゃないのか
人と機械と
果たしてどちらが
戦場では優秀
なのだろう？
機械は人間より
頑強ですが
機械であるが
ゆえに限界がある
一方で人間は脆弱ですが
限界を超越した
超越の達人——英雄が
現れることもあります
そういった
例外は度外視して
いいでしょう
大多数の兵士にとって
まずは生き延びるため
だけに弱点を克服する
ことが最優先です
だから人は戦場において
心を捨てて機械になる
私もそういった
凡人の一人です
やはり僕は
とんでもなく無駄な
回り道をして
いるんだろうか

切嗣 あなたは鉄を必要としているところに金塊を与えられたようなものです
これでは役に立たないと溶かして鉄にまで戻しているのが現状です
改めて刃物として使いたいのなら今度はそれを研ぎ直す工程が必要になる
そういうことかと
ねえ切嗣 今日は一体どんなものを見せてくれるのですか？
映画？
写真？
それとも音楽？
楽しそうだねアイリスフィール

ええ
あなたが与えてくれる知識は聖杯戦争と関わりないものばかりだけど大変に眩かされるものばかりです
世界というものがこんなにも豊かで多彩な場所だったなんて
私の基礎教養だけでは想像すら及びませんでした
あでもご心配なく
私の興味はあくまで二次的なものであり本懐を見失っているわけではありません
君が望むなら運命に背を向けることもできるんだ
え？
君か人間に憧れ残りの寿命をただ平穏に過ごしたいと望むなら——逃げ出せばいい
アハト翁も誰も追いはしない
道具には道具程度の期待しか課せられないものだ
君の自我と比べればそんなもの取るに足らない
だから聖杯の器に自我を与えるべきではないんだ

道具は自らの意思で戦えない
意思を備えたものは道具ではない
だから君は今日まで学んできた事柄を踏まえた上で改めて自らに問うべきなんだ
そして道具でなくなった者はまず自らの意思で戦うかとうかを問うところから始めなければならないんだ
君に課せられた使命とは本当に血を流して戦うに値するものなのかどうか
すべてを失えと言うのですか私に
そうだ
今ある全てを捨て去ることで君は一からやり直すことだってできる
君がそれを望むなら
あぁ
なるほど
理解しました貴方が私を教育しようとした意図が今ならばわかります
何？

今日まで貴方が
私に見せてくれた
知識 世界の在り方
人の生き方
これらは全て
貴方が背を向けて
拒んだ諸々
だったのですね？
それは
かつて貴方も
幸ある人生よりも
使命の重さを取って
血を流すに値する戦いを
選んだのですか？
だとしたら——
そんな風に価値の
在り処を見定め
貴方の正義に
確信があるなら
今こうして私に退けば
せたりしないはず
貴方には選択の
余地がなかった
のですか？

御宮切嗣
貴方の方こそ
つの
機能のみを設定された
機械のように生きて
きたのではないですか？
不思議ですね
人間の貴方が機械の
ように振る舞い
人形である私に
より人間じみた
選択をさせる
君は戦場に
持ち込む
道具としては
欠陥がある
そのままでは
不都合だから
調整している
それだけの
ことだ
なるほど
私が自分の役目に
ただ従うのではなく
思考する主体として
戦いに臨む初期衝動を
獲得すべきだと
そのために私に
怒りや喜びや
プライドを見出せ
というのですね？
まだ培養層から
出て数ヶ月の命
だというのに
随分と弁が
立つんだな
ユスティーツアの
設計を継承する
私の思考分析力を
甘く見てもらっては
困ります
貴方が用意
してくれた
学習教材からも
既に私は貴方とは
違う見解を導き
出しています
何だと？

怒りの感情こそが
戦う意思の源であり
その魂であるのは
真実であると
貴方は言った
しかし私が
分析したところ
怒りとはより単純で
包括的な衝動に
端を発しています
それは愛です
――ッ！

人は自らに
仇なす者に
対してだけ
怒るのではない

家族のため
同胞のため
祖国のために

猛々しく血を
流してきた人々の
記録を私は幾つも
確認してきました

貴方が語る尊厳
という概念も
つまりは自己に
対する愛

野の獣ですら
子を守るために
牙を剥いて戦いに
臨むのです

私は怒りの感情を
獲得する前にまずは
愛について学習
しなくてはなりません

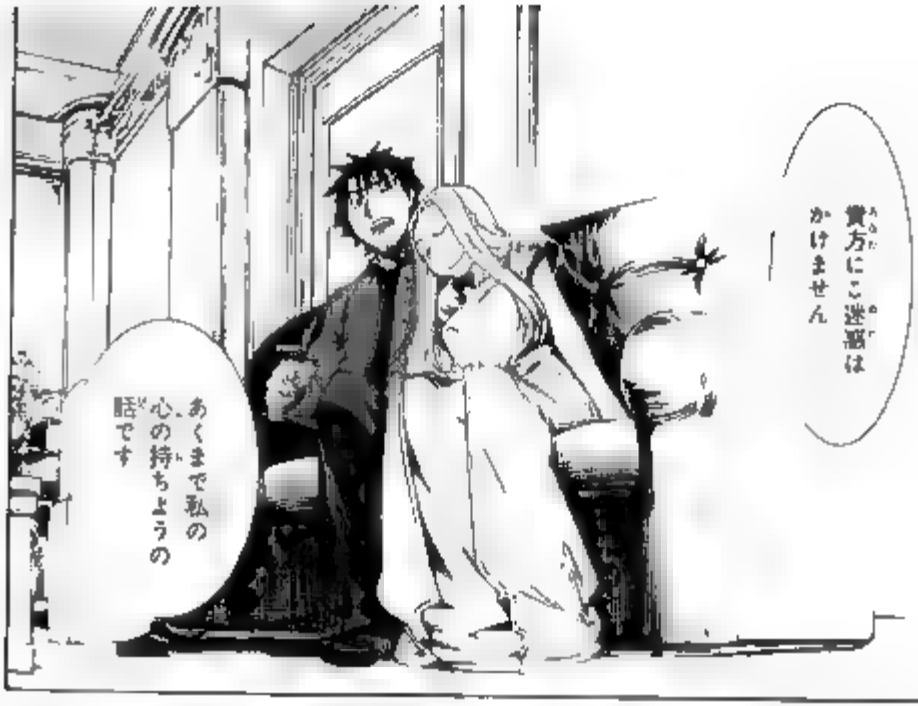
私は自らの
構造と機能を把握
しているがゆえに
私自身に対して
新たに興味や関心を
抱くことはできません

しかし愛情を
抱くべき対象は
何も私自身に限定
する必要はない

（例えば――）

衛宮切嗣

おい……何を言っているアイリスフィール
貴方が私に要求する強さ 戦う意思の獲得を最も速やかに実現するならまず貴方を愛情の対象とするのが適切ではないかと判断します
如何ですか？
冗談も大概にしろ！
私に強くあれと望んだのは貴方のはずです
貴方が私にもたらしたものを今になって奪われるなど断じて許容できません
貴方を傷つけんとする者に対してなら私は怒りを以て牙を剥くことができるでしょう
何か不都合がありますか？
いや、その……僕の方にだって都合というものが
いえ お構いなく


貴方にご迷惑はかけません
あくまで私の心の持ちようの話です

男女の愛情というのはそんな生易しい話じゃないんだ！
まったくこんなところから説明しなきゃならないなんて
きょとん

わかったとりあえずは教えてやる
自分がどれだけ見当違いなことを言っていたのか君はすぐにも思い知ることになるだろう
異味深いわとても期待しています

こんなのは
真似事
でしかない
僕は君を
愛せない
君も僕を
愛しては
いけない
どこまで僕は
愚かだったん
だろうな
何故ですか？
そもそもの
僕たちの
目的——
聖杯戦争で
勝ち残ることは
僕が君を殺す
ことと同義だ
やがてこの手で
死に追いやることか
決まりきっている
相手に命への執着を
未練を残し込もうと
していたんだ

それがどれほど
残酷なことか
少し考えれば
気付けたはず
なのに…
切嗣
「君を生かす」という
選択は今日まで僕が
犠牲にしてきたもの
この手で生贄と
してきた命を何もかも
無意味にする
僕は君を死なせる
ことでしかこれまで
積み上げてきた
負債を清算できない
そんな僕に君を
愛する資格など
あるものか
愛するものを
何故いけないの？
切嗣 貴方にしても
聖杯戦争の後に
つなぐ人生を想定
しているようには
見えません
貴方もまた
燃え尽きて
果てる心づもり
なのでしょう
そんな貴方に
対しても今 私は
確かに愛情を
抱いています
私たち二人に
あと九年
という制限が
定められている
だけのこと
その中で愛を
語ることに何か
不都合が
ありますか？

救いがない
希望がない
僕たちは互いに未来がない
未来？
愛情とはね
相手に救済と
希望を願い祈りを
託すことなんだ
君を救えない僕も
希望を持たない君も
愛し合うことなど
不可能な生き物なんだ
現に君は結局
未だに君自身を
愛することが
できていない
滅びることに
悲しみの感情を
抱かないのが
その証拠だ

強さのために
怒りを
怒りのために
愛か
そして愛のために
未来が必要
ということね

僕らは長すぎる
回り道をした上に
結局のところ
辿り着いたのは
行き止まりだ
すまないと
思ってる

いいえ
私は後悔なんて
していない
貴方から
受け取ったものは
全て大切な宝物です
今ここに未来が
ないのなら新しく
創り出せばいい
まだ何の枷も
嵌められていない
白紙のままの運命を

それは

私は女
貴方は男
一人が揃えば
新しい命を
作り出せる
私は人体と同様に
機能する子宮を
備えています
それを成し遂げた
自分自身を私は誇り
愛することが
できるでしょう

いつか貴方に希望を
もたらす存在を
産み落とすことが
できたなら——
誰に憚ることもなく
私の命とそこから
連なる未来の運命の
ために戦える
祈りを
託して——

アイリ
君はなぜ
そこまで

それは私か
貴方より強いから
前にもそう
言ったはずです
数多の戦いに
生き残ってきた貴方は
自分が誰よりも
強かったのだと思って
いるのかもしれない
でも貴方はただ
敵の死が自分より
早くなる選択を
してきただけ
それは自分が
より長く生き
永らえることと
同義ではない
貴方が手に入れた
強さとは死に急ぐ中で
敵の死をさらに加速
する手段でしかないわ
そんなものは
本当の強さではない

決して
諦めないこと
どんな窮地にも
それを打開する
策を見出し
実行できること
それが
アインツベルンの
定義なる
ホムンクルスの強さ
自らの滅びの
果てにまで
運成の意志を
継承すること
貴方がまだ
手に入れていない
真に強靭なる
魂の力なのよ
そうか……
どうやら僕は
君には
敵わないようだ

もう何も
心配はいらない
今ならば
確信できる
僕と君なら
どんな敵にも
屈することなく
きっと聖杯に辿り
着けることだろう

第151話／END

Fate
フェイト/ゼロ
Staff/
春乃えり、綾野貴弘、夏目りく